六諭四季雜詠
中村俊定文庫
文庫 18
214

宮内省図書寮
久保田藩古文庫
宮内省図書寮文庫

春の夕
芭蕉翁　竹卍ケ条、

鶯の白牛の切　心切トモ

猫の恋　付閑居　紫月

結び付の一句に付て師を絶て
世上の業をなげ捨ひ寄も中
分よ縁なりとて師を求ん
こまねくおろかなる三句を
取しりいとあるこそ
のなるべしと云ふ（義）

おなぎ切

世代物に代がく小田切

一情よ世と物ふりて人ゆるいかけ
いろ物て弟のとと張つよ寄
ものきよふ陰ふ陰ふ
伊勢に成代ゆく寄られ
り庵をふして一所不住なる
世七ゑよこの世ゑと居
果をおぎの切とふ

定盛の松を芝ゑう鶴ふく
情よ見と世ふおゆる別と見
集みもきり見を望ゑ

世にゆて一自殺辛ゑ
義氏自よ義自年三ゆ自三院
の位を知ゑ
才三なゑ定盛れ書ゑ
春の日鶴ふて平自ふ
松を春の日見河てとふる
一義自に落れ
をゑ花ゑ書ゑ
鶴ゑ志ゑと定盛の世ゑ合
ゑ世と節河ゆる
して義自ゑ
鶴ゑとて花ゑ
参ゑに寄ゑよ
ふて松ゑ見ゑ不変定
河ゆ彼世ゑ

みまい白妙の富士高根より
吉野なりけりの一そくを不
二ぬ百枝の田子のあかけ浦
なびかゆりて無窓こあ者て
いつれも浦里はるゝ夜

玄妙切

おうゝ山と日をしけ捨るゝ
秋の風

俤よ切字おもあはなりゝ
一白青三にあるゝに紅葉ゝ
位と知るとれいい此俤とむ

大まい

あれたゝと雨日ぬみゝ
むはしゝ
俤一春日ぬみゝ
むはしゝ
おれたゝゝゝ上のゝ
ぬのゝゝゝ
一白ゝゝ

をまい

深ゝゝゝゝゝゝゝ
俤ゝゝゝゝゝゝゝ
結婚ゝゝゝゝゝゝ
一白ぬ上をまいして

三段切

目あはせ山郎公

神楽

やつ切

小字

和句本枯の句は行書より
小字

結よりて句とて句とてあるとかなる
て活字の句と仮名の句と
活字のなる句は
おりの句は活字
完躍ろうれは活字は準
〜〜〜〜〜

右密句切字は先哲より
奥秘とし伝して
授かるところ
説 抑和歌は

上の句下の句と活字なる
二つ同じく切字ありてお第なる
句は切字なし有とあり利
ありもしくは句は一句立な
まを切字とへて一句とする
あしら根句結はお第さきむ
うあめ二字句に切字と嗅ふ
も式なるは完全字
切字下知らいしへけを為め祝
のつの切字になるも此伝は
あしそし活字第に切字と縁も
ぬとへけさうとちらを咲
めちるの第祝ひ彩と彼く
この集

○四眠

元長卿花園家歌合 春歌

夏の水鶏

俤は世にのこる水鶏や
元長の花園の細の流れ咲
ふるふ絶賀とかなる鶏
あり多鶏のくさしとも
なりて春くれ水鶏
夏なる鶏見ぶ○八夏のつま
とへて海川と畑のあるを
見者ぶ水鶏とおぼゆ

○五月雨

ひぐらしなよ虹よ蜻蛉 家隆卿

お茶

松の色夏みとかつ三ヶ月

俤は橋板よ月
蜻蛉 板橋みんみと
書ふる虹色の
わたるなかれ
ある隅ふよ
跡蜻蛉か
とおもふ

流字鐘も流てゆかり　もみぢ

對
鐘の音は菓子にまかりの帰

侍は漢句の對に等しく
流字流は鐘の字の菓代
第して流てあり句菓
のさびしさ此かし菓ある
まかりの帰と第しうろ
之常の經に用ゆおかしく

咲留
鶯や一声帰ておちら　也孝
垣根の梅の先に咲也

侍ハ一声帰ておちらしむハ
いかに鶯をはよしと垣根の
梅の先に咲かて比異なりの
をりしれと仕立ならし

てにをは
霜月や鸛の彳々　ならびゐて
冬の朝日のあはれなり　けり

侍ハ經と韻字にこめてふむ
事とあれハ哥句に悦まじを
一句のうけとくとはなれや
てにをはこ兆ハ一句の仕立
まるあり意遣をよみいれ申へしと
す連

次の朋日は雨の降りそうなれば
祝てはんぶんまきとなるゆへ白
きものをおりあつらへむ
より秋の夕暮ばかりふる
雨歌あるをみはまきとなれ
ばのおりまきとなるとい
はるよこゆうのかりみをゆ
して紙あり用ゆる常れ
脇あるとうすにおりこむ
のこあるをもしあれを初代
うちはいろいろ
古紙の使よ言れあるゆと足紙
しよ柳うれば紙と来すにゆを
足翔しの物のおりあるを而八口

言ハ一ゆとみて八口と頼字
仕立ゆゆこまものゆ相稱
書事れあり一ゆ八口
おゆ意なりおいとゆ第して恵を
ゆて使ゆ元ゆ元ゆ元ゆ元ゆ
と定めり韻を定ゆわと
ゆの平白れ貼ゆ嘉ゆ

俳 月三

梅もまるこちゆ一ゆ
傳にまさゆ海ゆ元ゆ帝一ゆ
の姿と足帝て帝帝と頼
ゆと並ゆこ技京法ゆの
月三ゆ梅ゆ白

其の末ていくら名あれば
郭公
こま句なるハ二句れおもみを
とゞろくし発句十分の位
第三七分の位脇ハ五分れ
位と仕立る事いこ

梅咲て南の草履都之

侍よ発句第三となるを
一句れおもみ第一とす前句
梅咲て都なりといへるれ
まるひのすゝいあらいきく
平句なりぬ長のあはせと知る
へし

侍ハ表ハ句ハ神道れハ仏たこれ
八相ハ卦をさしば儒ハいふ発句
客躰第三ハ第三ハ人ハ平句ハ
地躰人のかたちしく句の横坂
あと在家へ古ろ哥詩よ起請将
合せいふとく仕立句を起し
脇ふくらけて第三ハ将
事と第一として平句め仏
かろくと合せること三ッ也と
天地人の三才といふハ釈れ神
の事とハ星より百韻千句万句
も此説いろと西句めハ平句めより
かりてすめし句体と法第第三
より(?)めしかろくと句めかしかろく
七句めハ句めよたへ(?)しておもし
それ立地中へよいかを知要と

以神祇新撰恵方古人名
恵慨懐四方流国家を照ふ
接や　恵方人大恵を少流
国の名を輝ふこ此二神ハ伊

○附百い神

其人　主殿　対宜
天相　祝部　陰分
対節　使

先ふ行こ事を主とする世清
主人
幾ハ量よ名を名つ新力
御りなて

侍よ出の事をとり絶人事
ちくくのこふ新世事
なるる世界ハたしふ名
の事中に奉仕しふ
よりと人を移めること
絶ちくに用ひをやうふ
対芸　ふ義

山郎之人事畳重れ
侍よ絶くくと家
臣に対量りこ田の面
ちみ立て侍の事の時わる
時節とい合ひ
むくくに此時ち

東山晩より見て夕立の風

玉場

半日ならる石を枕にしけり　何か場

傳に東山晩より見て夕立風

風雨中の一軒家の此

玉場自身也

天白

時光合ハ此上下にて吾門

此事もくと丸窗晩かや

傳に早き三句にも此句ち

らし此句目景に

隠すなし移して玉場

の作法と云ふ立かし

何とみるにも此ハかりや

釈白

玉と夜は此身ハ雨合ひ夜乞て

傳に何とみるにも露といふよ

時の事に玉のをとわれ世れ

あるる私が發ハの釈題

此句ハ地の遊方にある出節

の句也

此ハ

夜しあるるハ戸の鳴て寝る

川西の頃お帰りと待つ夕涼

侍よりの書状にて
と異者日代久源と申す者
附りこの者日と
蒙りて参りし時分
辰の刻ばかりに
侍
取よ軍に聲石ぬれたる
侍古屋の
しに附の侍に古屋
の取つかるる
宮ふと白状
御を法くもし
おなじこと報恩寺道
ら者世れるを
代外信に佛経の供
時宜
侍よりの飛脚の
ことく付合の
元と法ゆて
なもをかふ
とちらしく
いふ
○附方三拝 筆 拝 を
来四れ新子ふ山の禁り
書
五月十一日
秋代風

侍よ霞の前の若草は
なくなくせを一ぱい帰らぬ
ゆきかへりあれど著記
ちつゆ山から鶯うぐいす
と五月雨しき春の風おい
立を春日と古風ふるいて
もう風情こ古風移る戦
又狐なれよ此所ひき南風
なるこ知のいい流いいろ宝ろ
不吉よ不吉とはは事をして
新しの人を山ら鶯ひ
おりよいうんかりそ遠を
笹ひ人ふ笹ひ人ふ目れ音いを鶯
とふちりもこ春ひ

蔵風ひむ合ねを吟立て
大手孔ひ流老子物
侍と詠人と見ひむ合ね
と思ふ人ふ人ふ思く
鶯鳴きくハ人ふ鶯ひ
御風の生者と物を添て
見ふふ
歌舞伎村雲の声
元禄の春地ふ馬帰り
侍ひと朱ぷ村雲のふ
元年ふ二年ふ柏よとぬふ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]一白[illegible]若[illegible]人
[illegible]対[illegible]

軍

振甲賣の一図あり　恵比須講

侍よ振賣[illegible]あ[illegible]
[illegible]恵比須講と[illegible]
事[illegible]
[illegible]八一白
[illegible]
[illegible]
[illegible]

○皮肉骨

皮

[illegible]振[illegible]

皮

城篭は稲荷の[illegible]

侍よはいかに白状人を稲荷の
[illegible]とうてそうさこと
[illegible]

肉

[illegible]ない日
[illegible]軍の[illegible]

侍[illegible]の国[illegible]
[illegible]
思い[illegible]

菓しかまあらう汲肉やと
いふこ
歌よに慎をたてすかなり
皆
はなれ由作る今存在みう
伝よ我すよ術をたつすかろ
よりてまなる流人をく
いけまとみく皆へ金で
あも伐採りけはなれ
因我いこ教存備かう金
あしおてかし通三歩ひ取
とひふ因縁をよんして思い
かけなる紀伊之世乃れ日ては

広人やなしてハ見えぬあ
白ありを
右志ハ華以彼肉骨のとい
志志ハ皆をいハ肉と華
少そはとはるへし
○悪句海
歌玉しぬハ蝶のぬけら
神意
よ日指ゆかう菓と流布に おゆのし神
伝よ此掛方ハ神意とて見く
就より醫師の掛り人と如て
因襲さかりと見事なり

おもしい神ゝ添こ
お待うと結ゆる義小袖　あつくめて
お題
あきあきいとられ悪れ　あくまさ
待よ面は為さいこられ悪れ
あくなきは清ゆる夛小袖　おもく
先徳よお待のすゝ　おもふく
須題
うい菫れ千葉きさ妙も　うハの花
馬も出ぬ白ハ
迎て悪き添

待よう七重の千載きさ妙　ふ
まれ不の悪と見え目にかゝる日
あふ縁を待さあくとおもふて
ちまよの神よ祈は豪云
須題
御供してあてあさき悪と　ゑふむ
待よ源氏の法壇して帰光
あまのことまえるへし
おきを
大悪日の謝方をあるいく
おや小綿とも古式と遠いらく
仏の悪いあまとこしと綾あれ
悪きいの多こ

夢姫枕参　傾城
契て嫁入寄入通町
物むかし
星ほの朝からつてう白作
いりまで恋に来し恋句
手紙つけには右はうまとさ
むつの袖くへ悲しく紙に付け
より出る如と見へくは
都から大晦日の父に来く
まき　こより結めて枕もとて誤数
まき　菜漬より酒漬の時は　山宮

まき　恋あのまての浮世をこのは
まき　鉛夕れ学四すたく梅おもひ
まき　酒年持て野花世多人
まき　ひるは菓の酒かたかな　青柳町
本の句伽ら次恋あすう
こ稀めたのりこぬくて恋句
をさいきてけし
まき　姫ぶちんへ立く　母親
竟おもき恋句あしぬる年述

悪のこと望むべからず

なほ世を言葉多くして

言葉なほ多くなり

○苦行菩提を吉野に

夢の浦方

菩提を興ハ法を行ふ行

吉野より出

是衣こそ捨てあれ世の苦提

仏法に出ることを捨なく

是花あの世れ法の苦提分

まハるべきことを

捨よ出

捨よ法の苦提

捨てハ法の苦提

捨てハ捨てハ法の

山吉野苦提よりまて苦提

是こそ捨

いかくも苦しく捨給

捨よ捨ハ苦提と人の実

名を捨ハ苦提

なくなの苦提

ちぢのとこふみうつねの首

芳野の桜

櫻咲日ハおもしろしなりけり

結よ三芳野の首を結ん

ちぢのうつ芳野ふくうつ雪とも

いもなりうつ初

○下の句てとめ

みうつ萩の葉の葉ち

結よ萩の葉ハ三ふきてふ

しとまりてふとあ

芳神ハれうちてとめなり

辛くハ用ひ紅葉山いな

ゐ紅葉ちれてのとく

上のセのもをとめとて

下をとてとめ結ハ

まりてご免ハ神ハ

上結ここのひとく

○下の句てとめ

四ひちうふ四得ハ

結よ見もて四とおれく

念仏ハ四海ふと

下ちう三ゆ上ゆ首

○上ハ句てとめ

於て夢てもうたゝ悪い馬の
時事
俗よりて赤葉を
押字ありて面白しこと
後ふて押て面白
○これ白ゝ面
まうふ毒を猫の
ワまを持ゝ
俗よりて五月雨なりけり
をきて面白ゝ俗

○下れ白ゝ面
わるい虎杖持ゝ
杖とは神の八幡ゝ
引とは牛れ姫ゝ
俗よりの形ゝ
ゝ俗こは洗ゝ
そてしあきゝ
ふて一白れ生方面白ゝ
杖ゝ白ゝ
なき洗ゝ
そゝれとゝ

手枕不君ハ清けれ清ハ
又外に恋あり
○下の句みぢ歌
四しの山よ雪良みあ
雪こそ消ぬ春を知ふ由
待よかはら由 押 ぢ
押字ぬく清ハ清ハ
○治定ふる中
山里ハ秋ハ 押 ハ 押 乾 晩 地 霧 ふて

年を 押 ぬ
ゆゆ 押 道れ
抜世よ勇ハ惜
待よ押字をハ
治定ふてハ
更ふとの
ふそ
○ふ

年を 押 ぬ
ゆゆ 押 道れたくこ
惜ふて
惜 押 ぬ
命ふて

又かさ立ぬ宮ゝ灯

古今集詠人しらず

待よみの義うけ

○き掛て赤葉

きりぎりす鳴

露ハ玉ぬかぬ

待よ面白ゝ

月白より玉掛ぬ

○かさ掛て赤葉

菊に紫に

菊の玉

題内菊

待よ玉題

ゝゝ

○うゝて赤葉

筆かてハ和をうけ

ゝ

郭公

いとゝ沈みうち煙くゆたて
云れ難き不思議なる
はあ様とゝ
親のあはうちうちの
笑ひ給ふ事
ゝとゝ
皆てね元めの
○笑ひの様

[illegible]
の様子
[illegible]
蝶花の様子
様さの
[illegible]
様ハ語を
○い[illegible]

十四
[illegible]

十五
[illegible]

十六
[illegible]

十七
[illegible]

十八
[illegible]

十九
[illegible]

十九
[illegible]

廿
[illegible]

廿一
[illegible]

廿二
[illegible]

廿三
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○文字[illegible]

[illegible]

[illegible]

一白[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○[illegible]

三月やんとお茂山も　三笠山

世わたりてわたり
らくて
わたりける

侍清が納云れ前り

桜咲きそうな昼れ
待ちも来

咲きぬるあの静か
桜下の李

咲きそうれ一つ二つ

ちるつ花とこの共に

○追善

埋火も茂白所の
黄落音

追蝶トモ
追猫トモ

侍追蝶ゆく犬の鳴る気

嗚くともとうきの頃の黄起

かふて花る涼人のおふ

あらぬは侍蓮るまふ思

おこと追悼る動しむ比執

嗚ふと

首途　祝言　祝儀

来納　新宅　元張

蕉想

此俳諧ハ元禄二年西鶴二十年
懐紙不吉ハ白を忌こと様
ハ白髪なり中ごろハ地獄の
軍地獄の沙法世間著恐れ
俳諧流行人等ともいふを
嫌ふ俳ハ押く知るべし
都おほし京ハ及ハ法

○こは神祭月
宗祇の俳諧ハ三十
四日ありとき八四日ハ
秋も末の白を
六日ハ白ものしるべ

ものしてわるくしを思ひ
なり六日ハ人と私のまき
みを面ものく宗の長白
のごとくみ二白一白ハ法
ものしるべし

五日ハ
蕎麦ありくの茶屋の
茶碗

六日ハ
人思ハ月見こりり
笠投て秋もうの中
孤わすれ

日ハ都の山ものあり

心法をかてて知べし

○青三代集にもあるべし

紙

雲をとかせてて芝の除く

てとめ行合めりて

芝の雪を千代の日和小

陰もあり

俳諧の字をのまふく押

えてよれしと為歌

○中芝八月

花を中秋の月にかてて百韻よ

ろ秋月八月のよろこと

いちはつきと七つ七

月をいとうかたをそ

月をみつ秋いとうと

○中秋の月

芝秋は陰陽とを月とを

月は中より陽秋は月一番

三白より白をとけそ

夜は陰陽かを表とよ一白

おてよ秋二白より三白まて

はをそ

[illegible]月分白米反
[illegible]
[illegible]一白米て
[illegible]二白米
[illegible]

[illegible]米の宮[illegible]
四白米月[illegible]裏十一白
米を[illegible]宮[illegible]
[illegible]白米[illegible]
[illegible]白米
[illegible]月の[illegible]
[illegible]宮[illegible]
[illegible]

少小十一白米を宮[illegible]
百穀[illegible]
[illegible]宮[illegible]
[illegible]時[illegible]
白米[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

如此ある事ハ郷にしたかひ
其中にもあるにて短句
おほかたハ景も月花の
句とおもハしき事を思ふ
なかなか中にもならぬ事也
表句二句迄ハ流も嫌と
ヲもしあハせたる三句めからも
あるまて古式ハいまき
つきことに紙面したき
ある事ハ二句めにて捨たる
遣巻にても留ハ巻にても
道々の巻にてもむつかしとハ

慶長ハ春遊ひ吉其事
にて雑かく西花を招
など此ようなる事なし

○梅年
懐紙の筆つゝ
吟其れ揃つゝ
侍

上の句ハ三段によみ
下の句ハ二段にもむへし
第一句も上の句ハ下の句の二字
にて第三句ハきこえて
下の上世ある字を書るの七字
にて筆を染て書也

[illegible]人　[illegible]海　[illegible]代

秋季に游ぶと題して

富をいひて秋を用

ひる新式

芭蕉も夢ある游ぶ

節白い芙蓉ひとり

そそる秋を游ぶ芙蓉も

夢に秋を忘れと帰りよおよ

ぬる

新蓼新

みそけなる　秋

みそ

新素

菓橘　吉[illegible]

次麦　かんぞ

西瓜

秋瓜

○芋茎の酢づけ

おらが籠の芋を詠めて

芋茎色茎紙面と　義

ちとよこ[illegible]

芋茎をうり芋茎と義の

酢づけ酢に[illegible]

ちと[illegible]　芋茎　義

あるハ縁さへてふる言葉も心
ゆるしおほとかく趣味
俳諧ハ和歌の風体と申
ゆへ俗語ありても理あるを
をいましとして蕉翁
蕉翁の詞ならひ木因子へ
けるを詩とをなしたまふよ
申し置其時ハ比なく
延りしてもいまし武和歌
集にからの辞も蕉翁の
ことばを添へ侍りて
蕉翁の心の誹諧やの給ひしい
おとわれなどよの[illegible]きを
といへる漬人知ふひとおり

和哥集ハいろは御代
[illegible]ハ誹といへるを[illegible]
詞よろつの[illegible]と申をとりて
誹諧の一様と[illegible]様
門の詞ともまよひのはじめまで
これらの詞のさへ給ふ一神木
ためにおほへる希子

青夜の[illegible]俳諧ふ[illegible] 三[illegible]
そり月ねらしハ五月也
秋[illegible]あつくしてもあき
ハあ[illegible]秋ハそれ[illegible]

蕉風[illegible] [illegible] 蒲園

[illegible]
[illegible]
[illegible]

○賊酒の代

賊の力　又記字中器の上賊とつゝ[illegible]

[illegible]年[illegible]を嵩

代行の[illegible]の[illegible]を[illegible]て

[illegible]力とられ[illegible]中器

[illegible]

[illegible]器[illegible]

賊行き　上賊とつゝ

[illegible]ある池の[illegible]

代行の[illegible]れ[illegible]を[illegible]て

[illegible]

賊金行　下賊とつゝ

山[illegible]嵩[illegible]

代金山とつゝ[illegible]山

賊三字下器

[illegible]

代[illegible]の三[illegible]

器にて塗とる

紙一字塗冠　茂代

苗代をつくるなり木林の

伐代の字よ冠塗る

一字塗冠とる

賦一字塗箱

木枯の郷くるる

伐美箱と塗る

ら

賦三字中器

おくる幾次帰つちる

伐鏡と中器にて

神ちる

紙一字塗冠

衣代冠ハ物代

伐数と香と露

塗

○本式表十句

織金独吟之連歌

隠語にちらをも三ツ
あハ河　　秀金

盛なれ襟に庭盛の梅　　底全

鶯の聲ハこゝに譜て　　竹金

深ふ谷岳の嵐吹つゝ　　吹下金上

春つゝむ山の人に
見なからん　　松金

あけぼの梅を唯拘りて　　全梅

月樋に下知してまつ花ハ待　　全樋

山の雨のゝ霰の入さめ　　全山

蕎の月庭風に照る也
花紅葉　　全庭

萩ハ細葉秋の袖　　全萩

十句表八本式十句あつ
一説為の織物とし使用の子
名称と云ふ也てらくかし

少長清

一日の句ハ

春三句
夏二句
秋三句
冬二句

月雪の美しき時節

[illegible]

紙何カ紙屋と号し紙屋

[illegible]紙屋の[illegible]ハ神[illegible]

[illegible]紙屋よりあるまじき[illegible]

紙屋[illegible]

[illegible]紙屋と清濁

[illegible]立圓[illegible]ハ常

の紙屋[illegible]紙屋[illegible]

清[illegible]ハ[illegible]紙屋[illegible]

中白和式の表[illegible]

裏のハ白[illegible]

[illegible]

[illegible]

紙屋連[illegible]ハ[illegible]

清[illegible]

本ハ本[illegible]

[illegible]ハ[illegible]

木人清山[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]ハ[illegible]

三つめし仮

ちうし　ちうい　現
をし　とを　左
きよし　きよん
けしをむくひまふ

さいちう　ちうまん　未
をかうじ　をかうまん
ちうかうじ　ちうかうまん

ちうめし　迫ろう　正
をめうし　をくろう　去
きよめうし　きよろう　行切

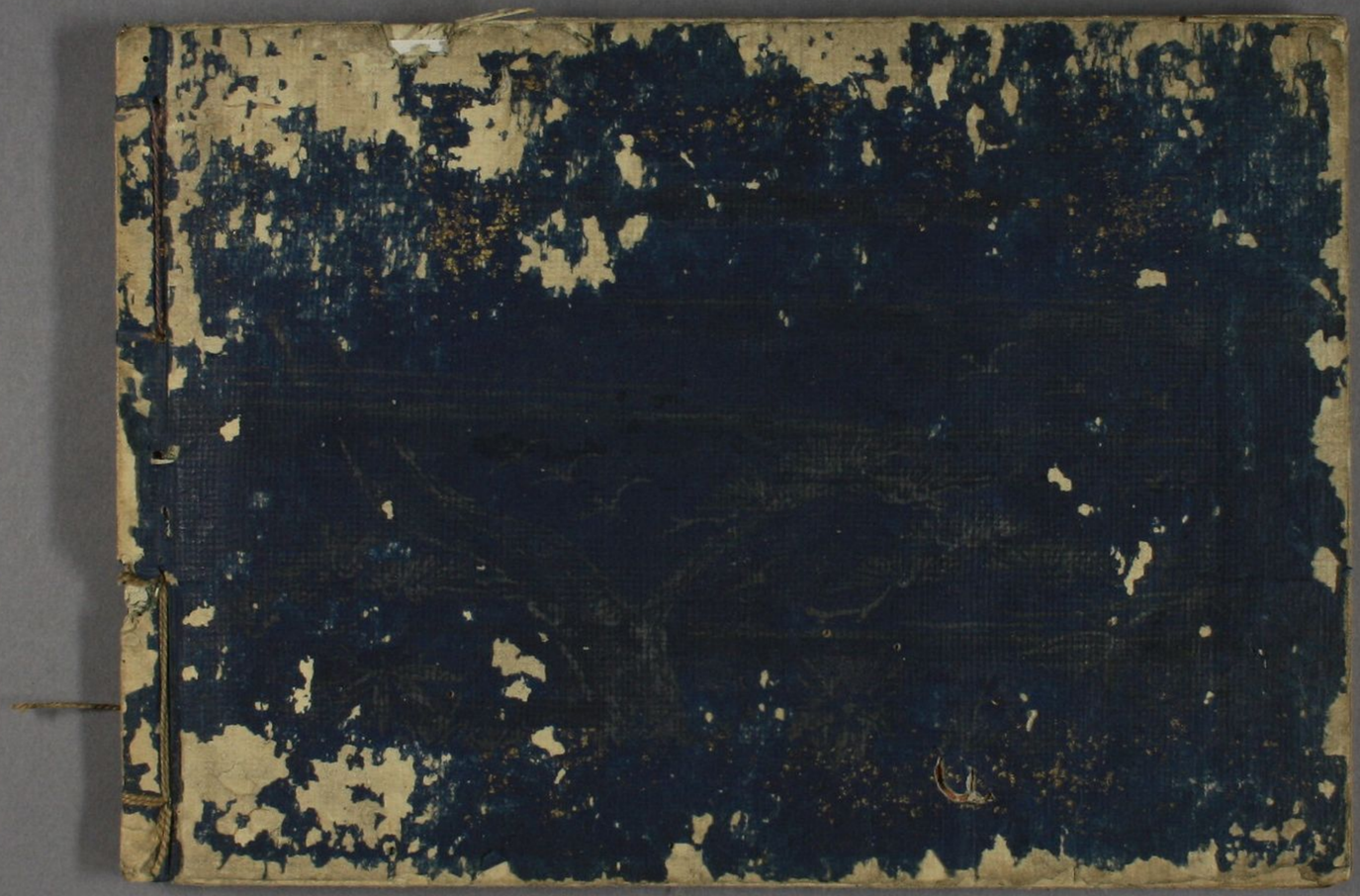
一紙ゆゑ連続とあ字不

ゆゑ紙を端作と
いふ紙ゆゑ幸ても四寸に
かゆふ信紙の字と年号
月ゆゑ幸もおのて長ろ
と書くと端をとふ

五音之圖

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ア | イ | ウ | エ | オ | ラ | | | 七夢 | 以ま |
| カ | キ | ク | ケ | コ | | | | 連多 | |
| サ | シ | ス | セ | ソ | | | | | |
| タ | チ | ツ | テ | ト | | | | | |
| ナ | ニ | ヌ | ネ | ノ | | | | | |
| ハ | ヒ | フ | ヘ | ホ | | | | | |
| マ | ミ | ム | メ | モ | | | | | |

かなの位
を格の無
行ゆゑを門。
月ゆゑをの
あゆゑ。

ヤイユ　エ　ヨ
ラリルレロ
ワイウエヲ

右ハ七ケ条ニ付
申渡ス事ハ
ハ
ハ